港と醤油と伝統の町 大野をたずねる
まちなみウォーク&トーク in 大野

醤油製造業を営む直江家。当主の直江茂行さんが、まちの歴史や醤油造りについて説明して下さいました。

かつてもろみ蔵だった場所には、昔の醤油造りの道具が展示されています。

黒い瓦屋根と板張りの壁が残るまちなみ。雨に濡れてしっとりとした風情が感じられました。

トークセッションの前に名物醤油ソフトでひと休み。

海が望めるやすらぎの森。

「もろみ蔵」で行われたトークセッション。なごやかな雰囲気の中、活発な意見がかわされました。

9月23日、まちなみ対策課の主催で、まちなみを歩いて体感しまちづくりについて考えていただくまちなみウォーク&トークin大野を開催しました。

大野町は、江戸時代から北前船の寄港地として栄えた港町で、大野醤油の産地としても知られる伝統のあるまちです。当日はあいにく小雨まじりの天気となりましたが、6才から75才までの43人が参加。独特の風情が残る大野のまちをおよそ2時間にわたり散策しました。

ウォークはクイズを解きながら歩いていくラリー方式で、まちに13軒あるこまちなみ保存建造物の町家建築の家々や、大野に住んだ幕末のからくり師、大野弁吉の碑や墓、北前船主が寄贈した鳥居が残る神社をめぐっていきました。

ウォーク終了後は、古い醤油蔵を改造したギャラリー・茶論「もろみ蔵」で、大野町の方々にも参加していただき、まちなみやこまちなみ保存建造物についてのトークセッションを行いました。

参加者の多くは、大野町の中を歩くのは初めてという人たちで、「金沢にこんな個性豊かなまちなみが残っているなんて初めて知った」「旧市街や郊外には見られない、静かさとゆとりが感じられる」という感想や、「大きな楽がある昔懐かしい家が残っていて嬉しかった。生活していくのは大変だと思うが、これからも守っていってほしい」など、様々な意見が出されました。

また、大野町の方々のまちづくりへの思いを聞いて、「町を大切にされている心意気を感じました」などの意見も出され、それぞれ自分たちの住むまちについて考える充実したひとときとなりました。

右／大野町でもっとも古い町家建築の喜楽家の庭園。天保の初期に建てられた北前船主の屋敷です。
上／縁側で大野の歴史を語る、当主喜楽彦三さん。
(左から2人目)

金沢らしいまちづくり

気象台によれば、今年の桜の満開は平年並みとなるようである。桜が咲き、どこか気分一新といった感が漂うこの時期が一年の中で一番好きな季節である。思い起こせば、大学入学直後に仲間と円山公園へ行き、「祇園・枝垂桜」を見たことがその始まりのように思う。夜桜がライトアップされ、花びらが夜空に舞う光景は息を飲むようであった。

清水へ祇園をよぎる桜月夜
こよひ逢ふひとみな美しき
与謝野晶子

金沢に住むようになって2年が経とうとしているが、金沢でも兼六園の夜桜をはじめとした桜を楽しんでいる。金沢の魅力は数多くあるが、私にとっては四季がはっきりしていることが一番うれしい。寺町辺りから犀川沿いを歩いて通勤しており、日々四季折々の多彩な風景を満喫することができる。「うつくしき川は流れたりそのほとりに我は住みぬ」と室生犀星がうたったそんな気分を私なりに味わっている。

ことに春の、犀川べりの土手からしだれかかるように伸びる桜の花の風情がよい。金沢の冬の終りを告げる春の使者である。

桜と言えば、出身地である岐阜県は「根尾谷の淡墨桜」が全国的に有名だ。桜が散るときに透き通るような薄墨の色を帯びることからその名がつくヒガンザクラである。推定樹齢千五百年といわれる日本第二の古木であるが、幾度もの枯れ死の危機をまぬがれてきたことから、甦りの桜としても有名である。その長寿には、桜の木自ら の力はもちろんであるが、周りの人々の努力も大きく貢献している。

金沢の豊かな自然景観も、何の努力もせずしてその姿が永く残るものではない。皆心のどこかでは、今日目にする景観はそのまま在り続けるかのような思いこみがある。それは、今年の大雪被害でもみられたような気持ちの中での「慣れ」にすぎない。在るものは常に変わることを肝に銘じ、景観保全のための努力を続けていかなければならない。

桜雑感
変わりゆくものを守るために

原田淳志（はらだ　あつし）
金沢市助役
昭和58年京都大学卒業
同年4月自治省入省
千葉県企画課、佐賀県財政課長、自治省総務課課長補佐、同企画課理事官等を経て、平成11年4月より現職。

世界地方都市十字路会議開催
「歴史と伝統を活かしたまちづくり」

昨年10月20日、金沢市民芸術村において国内外の都市が参加して、「歴史・伝統を活かしたまちづくり」をテーマに第9回世界地方都市十字路会議が開催されました。会議の中で、乾金沢美術工芸大学学長をコーディネーターとして、海外招待4都市の代表と山出金沢市長により行われたパネルディスカッションの内容の一部をご紹介します。

乾●皆様はそれぞれ、歴史と伝統のあるまちで保存と開発の調和に腐心しながら都市政策を行ってこられたわけですが、それぞれの経験を踏まえて、今歴史と伝統を活かすための理念と、またこれからの都市のあり方についてお考えをお聞かせ下さい。

今の時代にふさわしい伝統工芸を

ピエロ・P・カヴァルコリ　ボローニャ県都市計画・運輸局長●歴史のあるまちでは、伝統工芸や技術の保存が重要です。伝統工芸に継続性を与えるためには販路と販売先が確保されていなければなりません。そうした意味で理想的な状況が、産業革命以前の時代にあり、住居と工房、店が隣接し、工芸製品と日常生活が密接に結びついていました。これからは、街の大学生の若い力を活用し、新しい時代の手工芸を産み出し、インターネットなどの新しい手法で、以前の理想的な時代を取り戻したいと思います。

ボローニャ（イタリア）　11世紀に創設された世界最古のボローニャ大学がある中世の趣を持つ街。およそ2万軒の住宅の修復工事を行い、18～19世紀の古典的様式美を持つ住宅群を再生。

（写真提供：イタリア政府観光局［E.N.I.T］）

守るべきは都市の雰囲気でありモノではない

デビッド・A・ボールディンジャー　フィラデルフィア都市計画委員会副運営理事●一番重要なのは歴史の保全と街の発達のバランスです。街は有機的に成長していくべきで、現代的なビルの建設も必要です。都市とはモザイクのようなものです。

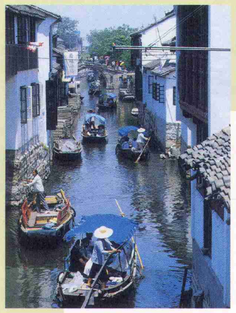
フィラデルフィア（アメリカ）　18世紀末、アメリカ合衆国の首都だった当時の景観を残す。都心部の荒廃した住宅地を市が買い上げて高級住宅地として再開発した。

（写真提供：フィラデルフィア市）

歴史●まちなみの保存をするために、新しいものをブレンドすることにより、より良いものをつくっていくことも一つです。我々が守っていきたいのは即物的なものではなく、都市の雰囲気なのです。

新たな歴史をつくるため、まちに新たな活力をそそぎ込む

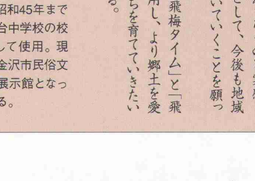
ツァン・スウドオ　蘇州市園林管理局副局長●都市としての機能を満足させることが第一です。もっとも大切なのは住環境で、それを整えた上で、都市独自の特色を作ることが必要です。我々が、今行なったことが新たな歴史になるのですから、過去の雰囲気だけにとらわれてはならない。まちに新たな活力をそそぎ込み発展させていきたいと節に願っています。



蘇州（中国）　水上交通を中心に、春秋時代から発達した古都。寒山寺、太湖や、国宝級の庭園がある旧市街地を保存区域とし、その外郭にインフラの整った新たな街を造成している。

大切なのは都市の個性、記憶に残る場所を作ること

マーティン・バックル　カーディフ市・カーディフカウンティ戦略企画部長●歴史や伝統の重要性は他とは違う個性にあります。他と違う特徴、個性を保ちさらにそれをコミュニティー全体に広げていくことが重要です。今、我々に課されていることは、伝統的な場所の個性を守り、記憶に残る場所を作ることです。全てのまち、全ての都市が記憶に残る場所にならなければならないと思います。



カーディフ（イギリス）　古代ローマ時代からの歴史を持つカーディフ城を中心とした旧商業地に、新たにショッピングセンターを造営。市の中心部を商業活動の中心とすることに成功した。

（写真提供：カーディフ市）

外への拡散ではなく内部の成熟を

山出　保　金沢市長●イギリスの作家C・W・ニコル氏は「醜いと感じられるまちに共通する事は、自然や歴史への無関心」と述べています。日本の戦後のまちづくりの反省は自然と歴史に対する配慮を欠いたことです。自然と歴史は多様性、固有性につながるものなので大切にしなければならない。また、都市は住む・働く・楽しむ、いずれの機能も持っていることがあるべき姿です。今、我々は、外に拡散するのではなく、中を凝縮して成熟させる時期にきているのではないでしょうか。フレンドリー・シティ、フレンドリー・コミュニティー、そういうまちこそ21世紀にふさわしいと思います。

金沢　16世紀半ばに城下町として成立。400年戦災に遭うことがなく、藩政時代からの土塀や古い家並みなどが残る。伝統芸能や伝統工芸もさかんである。

人間中心の都市へ

乾●伝統と歴史の価値は、ただ建物が古いとか見た目が美しいということではなく、その建物の中に充満するかつて生きた人々の息吹が我々に何かを訴えかけてくるところにあります。その精神を大切にして、新しい時代に新しい形で活かしていくことが大切です。21世紀の都市は人間中心でなければなりません。また、環境と人間との関わりがますます重要になってくることでしょう。そうしたことを踏まえて、伝統と歴史を考えていかなければならないと思います。

主計町に続き、飛梅町、下石引町で旧町名復活

加賀百万石の藩政時代に由来する旧町名は、地域の歴史や生業を物語る金沢固有の文化遺産です。金沢市では、平成11年10月の主計町（かずえまち）に続き、平成12年4月飛梅町（とびうめちょう）、下石引町（しもいしびきまち）の二つの旧町名が復活しました。旧町名復活にあたって、飛梅町にある紫錦台中学校の守校長先生に学校教育と地域との関わりについて思いを綴っていただきました。

「飛梅タイム」と「飛梅祭」で郷土を愛する子供を育てる

金沢市立紫錦台中学校長　守　直弘

金沢には、城下町のなごりを持つ旧町名が数多く存在している。それらは現在まで深くしみわたり、親しまれてきた。紫錦台中学校の所在地も例外ではない。金沢の伝統文化に調和する旧町名が復活したことで、地域をより身近なものとして、今まで以上に親しみを感じる機会となった。そこで、地域との結びつきを深めようと、授業の中に伝統文化学習を取り入れることにした。

本校では、12年度よりスタートさせた「総合的な学習」の時間を「飛梅タイム」と名付け、生徒たちは地域に出かけ、体験学習を行っている。「飛梅タイム」は、「ふれる」「さぐる」「みがく」の3分野があり、生徒たちは、体験学習から自身で何か課題を見つけ、さまざまな角度から見つめ、解決していく力を身につけることを目的として活動している。

また、地域にとけこみたい、地域の知恵を吸収したい、地域に親しまれる学校でありたいとの願いを込め、毎年11月に「飛梅祭」と名付けた発表会を実施している。12年度は第2回目を実施したが、当日は、保護者、地域の方々はもちろん、かつての「飛梅祭」にノスタルジーを感じる年配の方々の参加もあり、充実したものとなった。生徒たちにとって、多くの方々に学習発表することで、より一層の成熟感も味わえ、郷土愛にもつながったものと実感している。学校で開催する地域の行事として、今後も地域に深く根付いていくことを願っている。

今後は、「飛梅タイム」と「飛梅祭」を活用し、より郷土を愛する子供たちを育てていきたいと考えている。

地域の方も多数参加した「飛梅祭」

三尖塔
明治の面影を残す旧石川県立第二中学校・三尖塔校舎。昭和45年まで紫錦台中学校の校舎として使用。現在は金沢市民俗文化財展示館となっている。